

なないろ畑・CSA 農場訪問記

御用納めが目前にせまった 2010 年 12 月 25 日、社員数名で神奈川県にある農業生産法人なないろ畑株式会社(以下、なないろ畑)を訪問した。これまでも我々は岡山県牛窓や茨城県里美などを訪問し「国際耕種が日本の農業とどのように関わられるのか?」ということを探索してきたが、今回、我々と交流のある神奈川県の普及員の方の紹介で、CSA 農場という我々にとって新しい営農形態の農場を訪問することができた。

なないろ畑は神奈川県のほぼ中央、大和市と綾瀬市を中心に、およそ 2 ヘクタールの圃場で野菜を主とした有機栽培を行っている。現在は事務仕事から農作業まで 7 名のスタッフで運営しており、代表の片柳氏は大学卒業後家業を継いだ後、45 歳のときに農業を始め、試行錯誤を繰り返すうちに CSA という経営に辿り着いたという。

CSA とは Community Supported Agriculture の略であり日本語では「地域に支えられた農業」「地域支援型農業」などと訳されている会員制の営農形態である。CSA 農場では、地域住民が農場の会員となり、会費として定額を農場に納め、農業者は集めた会費で農場を運営していく。作物の出来不出来や端境期などに影響されず、作付け前に資金を調達できるため、農業者は安定した経営を行うことができる。また、より積極的に農場と関わりたいという会員はコアメンバーやボランティアとして農場での農作業や収穫後の出荷調整作業などに参加し、農場を中心としたコミュニティを形成していくということが CSA の大きな特徴である。現在、なないろ畑では出荷調整はすべてボランティアが行っているようで、我々がなないろ畑の出荷場を訪問し片柳氏の説明を受けている間も、数名のスタッフやメンバーが出荷調整を行っており、作業後にはみんなで昼食を取っていた。片柳氏は、コミュニティとは活動を通じて志のある人達が集まり作って行くものだと言っていた。

なないろ畑のコミュニティはもともと地域通貨のコミュニティから始まった。地域通貨とは、日本銀行が発行する法定通貨(円)と違い、特定の地域内でのみ流通する通貨であり、ボランティア活動など地域活動の報酬として配布されることが多く、地域の活性化に役立つ通貨であるといわれている。なないろ畑の場合、前身である「とらたぬ農場」が花の苗で地域通貨に参加したことがきっかけとなり、CSA 農場を始める以前から既に活動の核となるような地域通貨のコミュニティを形成することができていた。

このような既存のコミュニティに加えて、農場ではメンバーリストを作成し、会員やメンバーリスト登録者に圃場の様子や作業内容を毎日発信し、希望者はその作業を手伝うといった風に、会員を単に顧客として扱うのではなく、農業に興味を持ってもらうための活動も行っている。消費者に栽培現場のことを知ってもらうことで消費者の意識を改革し、コミュニティの輪を拡げていきたいと考えているようだ。このように消費者を巻き込んだコミュニティ作りの取り組みは、消費地が近くにある都市近郊農業だからこそ成せる業なのかもしれないが、生産者と消費者という分類ではなく、農業を中核としたコミュニティを形成していくというのは、とても興味深い活動に思えた。

日本の農業を取り巻く現状は厳しく、農水省の統計によると平成 21 年の露地野菜農家の農業所得は 177 万円であり、サラリーマンの平均所得と比べても非常に低い。なないろ畑の取り組みは、このような状況で農場を維持していくために、生産者だけでなく会員みんなで支え合おうという活動である。また、なないろ畑では余剰分の販売を行う「Farmer's Market」も重要な活動の一つと位置づけており、各種補助制度を利用した規模の拡大や「6 次産業化」も視野にいれている。なないろ畑は国際耕種からも近く、このような動きの中で、将来両者が連携できるような機会を得られればと考えている。



なないろ畑出荷場



出荷場で売られていた野菜たち



圃場で片柳代表の説明を受ける